



TITLE:

<Book Review>Der Kampf der
Götter und Dämonen, aus dem
thailändischen Ramakien
übertragen von Ch. VELDER,
Schweinfurt, 1962,322p.

AUTHOR(S):

岩本, 裕

CITATION:

岩本, 裕. <Book Review>Der Kampf der Götter und Dämonen, aus dem thailändischen Ramakien übertragen von Ch. VELDER, Schweinfurt, 1962,322p.. 東南アジア研究 1964, 2(1): 128-129

ISSUE DATE:

1964-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54895>

RIGHT:

利用・産業・交通等の地図、あるいは特定の主要地域については詳細図、首都については都市計画図がおさめられている。そのあと、24ページにわたるロンドン大学 D. G. E. Hall 名誉教授の東南アジア史概説が、多数の写真入りで、加えられている。そして最後に地名索引7ページがある。

この内容から明らかなように、地形図だけでなく、多数の特殊図がおさめられていることを特色とする。だから、本地図帖は自然・民族・産業その他の東南アジアの地理学的特徴を明らかにするのに非常に効果的である。しかも、これにその道の最高権威ホール教授の東南アジア史概説が加わることによって、東南アジア研究の入門書としての意義もきわめて大きい。

しかも、製版・印刷・製本などの地図帖作成の技術はすばらしい。さすがにオランダの出版物だけのことはある。ちょっと非のうちどころがない。とにかく、見ていて飽くことをしらない、たのしい、またおもしろい地図帖である。その詳細なインデックスとあいまって、東南アジア研究者のまさしく座右に置かれるべき地図帖である。推奨してやまない。

ただ、これは atlas であって map でない。たとえば、タイは1/450万の縮尺で示されている。だから実用上不便な点があるのも当然である。しかし、現在東南アジア全域にわたって、米空軍の作成した1/100万がある。これは容易に入手利用できる。さらに、それより縮尺の大きな地図は東南アジア各国からそれぞれ自国について刊行されている。たとえばタイの1/25万などはすばらしい。だから、本地図帖はどこまでも atlas としての目的をもっており、map としては、いくらでも補いのあることを銘記しておきたい。

わたくしは、前号で紹介したフィッシャー教授の東南アジア地理、そしてこの東南アジア地図帖の刊行こそ、東南アジア地理にかんする最近の発展ぶりを如実に示すものだと思う。貴重な業績である。

(本岡 武)

Der Kampf der Götter und Dämonen, aus dem thailändischen Ramakien übertragen von Ch. VELDER, Schweinfurt, 1962. 322p.

タイの民族詩として有名な『ラマキエン』の全訳である。この叙事詩については、これまで René Nico-

LAS: *Le Ramayana siamois*, Revue indochinoise, 1928 ほか一・二の文献しか知られていなかったのであるが、いまここに全訳が刊行されたことは誠によることばしいことと言わねばならぬ。

インドの大叙事詩『ラーマヤナ』Ramayana は、のちにインドの国民的英雄となり神として崇められたラーマ王子の武勇譚であるが、それだけにインドにおいては勿論のこと、インド文化の波及とともにアジアの各地に流布し、それぞれの民衆にさまざまな影響を与えたことが知られている(筆者の『インドの説話』東京、昭38、pp.10-11. 参照)。特に、東南アジアにおけるラーマ伝説の文化史的意義は大きい。この『ラーマヤナ』のタイ伝本が『ラマキエン』(ラマの讃嘆)であり、現在では舞踊劇として著名である。

『ラーマヤナ』がいつタイに伝来したか、またラーマ(タイでは Phra Ram という)伝説がいつごろからタイ族の間に弘まったか、すべては不明である。しかし、ラーマ伝説の現在における影響は、他の東南アジアの諸民族に比べて、タイにおいて最も著しいことが知られている。まず、タイの現王朝の代々の王は Rama の称号を有して Phra Ram Djakri と呼ばれ、Rama の権化とされる。寺院の祭礼あるいは宮廷の祝宴に際して王が河を渡るとき、王は龍王 Ananta Nakharat (Skr. Ananta Nāgarāja) を像った船に乗り、王の旗には猿王 Hanuman (Skr. Hanumat) が描かれ、王の印章は鳥王 Khrut の姿を示している。いずれも Phra Ram を授けた英雄である。そのほか、王が行列に際して乗る車は『ラマキエン』に見られる天帝 Int (Skr. Indra) の楽園 Wechayan (Skr. Vaijayanti) の名で呼ばれるなど、タイの王廷生活は『ラマキエン』の伝統の中にあると言っても過言ではない。

『ラマキエン』の伝承はタイ族の日常生活の中にも生きている。タイ人の多くの者は Phra Ram 伝説に由来する名を持ち、親は子がこの伝説に登場する威力のある英雄の加護を受けることを期待する。また、巷間の言語表現に『ラマキエン』に関係するものが多い。例えば、腕白な子供は Thorapi あるいは Hanuman と呼ばれるが、これはこの伝説に登場する水牛あるいは猿王の名である。可愛らしい少女は Phra Ram の妃 Nang Sida (Skr. Sitā) に、力の強い若者は Phra Ram に、そして冗談を言う男は Phra Ram

の猿に喩えられる。さらに、Ayuthia, Lopbwi などの都市名、Sanphaya などの山名は、いずれも Phra Ram の物語の中に見られる。

このように、『ラマキエン』のタイ族に与えた影響は、非常に深く、かつ広いことが知られる。現在の舞踊劇は約200年前に Phra Ram I 世によって編述された物語詩からエピソードを上演しているが、それ以前には人形劇として、『ラマキエン』はシルエットあるいは影絵で上演された。その人形は鞣していない水牛皮を切抜いて2本の竹に張って作ったものであるが、訳者 VELDER は本書の中にこの人形を44図も挿入しており、Schattenspiel の資料として興味深いものがある。巻末の固有名詞索引はタイ語におけるサンクリット語の借用を検討するのに有用であろう。2葉の系図表は登場する人物の関係を知るのに便利である。

訳文について批評することのできないのは残念であるが、流暢で判り易い。訳者は *Chieng Mai* に在住するようであるが、詳しいことは判らない。

(岩本 裕)

Nature and Life in Southeast Asia, Vol. III. Fauna and Flora Research Society, Kyoto, Japan, 1964. 466p.

大阪市大の東南アジア研究は吉良龍夫教授(理・植)を中心として着々とその成果を挙げておられる。この報告はその第3巻で、今までに行なわれた幾度かの調査隊の資料に基づき、生物学関係の報文が編集されている。

目次をひろってみると、

タイの蘚苔類 堀川芳雄・安藤久次(広大)

タイの淡水産軟体動物 波部 忠重(科 博)

タイの水ダニ類 今村 泰二(茨城大)

土壌内小節足動物の概観

今立源太良(東京医歯大) 吉良龍夫

タイのトンボ類

タイ・マレーのトンボ類 朝比奈正二郎(予研)

タイ・マレーの蝶類 川副 正人(日新高校・布施)

東南アジアの甲虫(Ⅲ) 中条 道夫(香川大) 他

タイにおける害虫防除の基礎調査 I

岩田久二雄(兵庫農大)

タイにおける狩猟蜂(Dieranorhina, Gastrosericus)の生態 岩田久二雄・吉川公雄(大阪市大)

タイにおける天敵としての狩猟蜂

吉川 公雄

熱帯の竹に営巣する前社会性膜翅類の巨大卵について

岩田久二雄

1961—1962東南アジア採集の医用双翅目について

加納 六朗(東京医歯大)

東南アジア採集のミバエ科・オドリバエ科

伊藤修四郎(大阪府大)

1961—62東南アジア採集のショウジョウバエ

岡田 豊日(東京都大)

と、まことに多彩である。次号はこのような生物相や各個生態の研究に加えて、森林相の研究、北西タイの民族植物学、北部東南アジアにおける宗教的標示の人類学的研究が予定されている。

大阪市大は本年度、さらにカンボジア計画を推進されていると聞いている。同大学の実行力に敬意を表するとともに、その成果について大いに期待したい。

(吉井良三)

Adam Curle: Educational Strategy for Developing Society—A Study of Educational and Social Factors in Related to Economic Growth, Tavistock Publication, London & Liverpool, 1963. ix + 180p.

著者は、現在 Harvard 大学の The Center for Studies in Education and Development の教授兼所長であるが、以前は Oxford で社会心理学の講師をつとめ、1952年から1956年まで Exeter 大学の教育学および心理学の教授であった。その後3年間 Pakistan 政府の社会問題顧問となり、1959年から1961年まで Ghana 大学の教育学講座を担当した。また、世界を広く旅行し、中近東の研究調査に従事したこともあり、本書はこうした広い経験をもとにして、東南アジアに限らず、新興諸国一般の開発問題を教育的・社会的側面から論じたものである。著者は、低開発の諸問題が本質的に、あるいは完全に経済的なものであるという仮定こそ、過去における誤りの主要な源であったとみなす。

低開発諸国はなるほど貧困である。しかし、それらの国はその人的資源がほとんど開発されていないが故